保育実習生のストレス反応と曖昧さへの態度との関連

Secline 方式を用いた時系列データによる検討

○竹中一平¹・原奈津子²

(¹武庫川女子大学文学部・²就実大学教育学部)

キーワード：ストレス、曖昧さへの態度、Secline 方式

The relationship between childcare training students' stress response and attitudes towards ambiguity

Ippei TAKENAKA¹, Natsuko HARA²

(¹Mukogawa Women's Univ., ²Shujitsu Univ.)

Key Words: Stress, Attitude towards ambiguity, Secline method

目 的

保育士を目指す学生にとって、保育実習の単位の取得は必須条件である。その一方で、実習場面は学生にとって多大なストレスとなる(千葉, 2010; 神林ら, 2011)。

多くの学生にとって、実習が大きなストレスとなる一つの要因として、実習状況に対するあいまいさが挙げられる。すなわち、保育現場における自身の適切な行動が不明確であるがゆえに、「どうしていいのかわからない」という状態に陥りやすく、それが強いストレス刺激となるのではないかと考えられる。そこで本研究では、実習ストレスと、曖昧さへの態度(西村, 2007)との関連を明らかにすることを目的とする。

なお、本研究では、Secline 方式(鈴木ら, 2009; 竹中ら, 2009; Suzuki et al., 2010)を用いて、実習期間中のストレス反応の程度について時系列的データを収集・解析することによって、曖昧さへの態度との関連を検討する。

方 法

調査対象 大学生・短大生 146 名(男性 13 名, 女性 133 名, 平均年齢 19.5 歳)。このうち、本調査対象者は短大生 74 名(男性 9 名, 女性 63 名, 不明 2 名)であった。

調査時期 2011 年 6 月上旬(事前調査)、7 月下旬(本調査)

調査内容 事前調査の質問項目：曖昧さへの態度尺度(西村, 2007)を元に各下位尺度の項目数を 5 項目ずつに修正した尺度、ネガティブな経験を反芻する傾向を測定する反芻尺度 14 項目(伊藤・上里, 2002)、状況を楽観的に認知する傾向を測定する楽観主義尺度 9 項目(中村, 2000)、安定的な自尊感情の高さを測定する特性自尊感情尺度 5 項目(市村, 2010)について、それぞれ「全くあてはまらない」から「よくあてはまる」までの 5 件法で回答を求めた。

図 1 Secline 方式による調査用紙の例
(図内のグラフ線は回答例である)

Secline 方式による測定項目：抑うつ状態を測定する K6 尺度 6 項目(川上ら, 2004)について、それぞれ個別にグラフ線の描画を求めた(図 1)。グラフ線は、保育所実習期間(実習 1: 6/13~6/23, 実習 2: 6/27~7/7)を含んだ 6 月 12 日から 7 月 8 日までの 27 日間における K6 各項目に対する評定を線で描くように求めた。

結果と考察

1. 尺度構成

事前調査で評定を求めた個人特性 3 尺度および曖昧さへの態度尺度の下位尺度 5 尺度について、主成分分析を用いて次元性の確認を行ったところ、すべての尺度について次元性が確認された。また、各尺度の α 係数は、ネガティブな反芻尺度が .88, 楽観主義尺度が .69, 特性自尊感情尺度が .82, 曖昧さへの態度尺度が .63 から .80 と高かったため、十分な信頼性を有すると判断された。そこで、各尺度について平均値を算出し尺度得点とした。

本調査において、Secline 方式を用いて回答を求めた K6 尺度について、描かれたグラフ線を 200 に分割し、6 項目の α 係数を 200 時点分算出した。その結果、すべて .80 以上であったため、十分な信頼性を有すると判断された。そこで、200 時点について平均値を算出し、K6 の尺度得点とした。

2. 実習ストレスと個人特性および曖昧さへの態度との関連

各尺度について、回答者を人数で 3 分割し、低群と高群の 2 群について K6 の尺度得点を 200 時点分比較した。各時点について t 検定を行った結果、以下の尺度で有意な差がみられた。ネガティブな反芻に関しては、実習 1 の後半から実習 2 開始直後および実習 2 後半で有意な差がみられ、反芻傾向の低い回答者に比べて高い回答者の方がストレス反応の程度が高かった。また、特性自尊感情に関しては、実習 2 の期間全体で有意な差がみられ、特性自尊感情が高い回答者に比べて、低い回答者の方がストレス反応の程度が高かった。一般的に、ネガティブな反芻は抑うつに代表される慢性ストレス反応を引き起こすとされるが、実習場面においても、自身の失敗や周りからの叱責等を反芻しやすい回答者ほど、各実習の後半においてストレス反応の程度が高くなっていった。反面、自尊感情の安定した回答者は、後半になるほどストレス反応の程度が低くなることが示された。

曖昧さへの態度尺度では、曖昧さの排除の下位尺度について、実習 1 前半で有意な差がみられ、曖昧さの排除の得点が高い回答者に比べて低い回答者の方がストレス反応の程度が高かった。曖昧さの排除は、曖昧な状況を積極的にはっきりさせようとする態度を指すが、保育実習前半の「どうしていいかわからない」状況において、積極的に曖昧さを取り除き、問題を解決しようとする態度がストレス反応を抑制することが示唆された。

※引用文献は当日配布資料に示す。